

松本市教育研修センターだより

No.19 令和5年 10月 31日

今、求められる教育課題への挑戦

10月に入り、一気に季節が進み、朝夕は肌寒さを感じるようになりました。東山の稜線が色づき始め、遠く北アルプスの山々が白く輝いています。「学びの秋」の言葉通り、教育研修センターでも9～11月の3か月の間に23の研修講座を企画・実施し、多くの先生方にご参加いただいています。

松本市で独自に研修を実施する最大のメリットは、市の教育課題や願う教育のあり方に即応して、柔軟に研修を企画・実施できることです。この観点から企画・実施した研修の中から、今回は、10月に実施された「デジタル・シティズンシップ教育研修」「ファシリテーション研修」の2つについてご報告します。いずれも、斯界の第一人者の先生を講師として実施し、「デジタル技術をよりよく活用し、ウェルビーイングを実現する力を育むこと」、「『学びの伴走者』として対話を活性化し、主体性を育むこと」等、今、強く求められる教育のあり方に向けて、挑戦への意欲と見通しを高めていただきました。

「『善き使い手』を育む」 デジタル・シティズンシップ教育研修

学校の中で日常的に授業に活用されているICT機器。家庭でも社会でもWebにつながる多くの機器に私たちは囲まれており、今や、デジタル機器なしには日常生活が成立しない状況を迎えています。このような社会を生きる子どもたちに、単にネットのトラブルを回避する態度を育むだけでなく、「デジタル技術の活用を通じて、社会に積極的に関与し、参加する能力」を育むことを目指す、「デジタル・シティズンシップ（以下DC）教育」の必要性が高まっています。

10月5日、DC教育の第一人者で、日本DC教育研究会副理事長の今度珠美先生を講師として、「DC教育研修」を実施しました。

前半、今度先生からDCの概念やその意義や必要性等について演習を交えながらお話いただきました。参加された先生方は「責任とは？」「自分の『行為』が及ぶ責任の範囲は？」といった問いを協議しながら、「立ち止まり、考え判断し、相談し、よりよい行動をする」力をつけるDC教育への理解を深めました。

後半は、「45億人の目と足跡」「ネットいじめにどう対応していくか」等のワークシートを活用し、具体的な授業の形での研修を通して、DC教育の具体的な授業イメージを深めていただきました。参加者の先生方は、学び手の立場で授業に参加・協議され、子どもの反応を実感しながら、実践に向けて見通しを高められました。



【参加者の感想から】

- ◆DC教育と聞き、研修前は、ICTの知識や技術であると考えていました。しかし、研修を通して、対越なのは『人』だと感じました。知識や技術も必要ですが、それをうまく使うには、人と人との関係を作らなければならないのだと思います。子どもたちがアップスタンダーになるためには、行動ができる学級や家庭や地域の関係づくりが必要です。そのことをいつも忘れずにICTとかかわっていきたいと思います。
- ◆新たな気づきがたくさんありました。本の購入も考えています。本を読みながら今回得たこと、考えを自分なりにまとめ、学校の教育活動の導入、実践をしていきたいと思いました。
- ◆ルールではなく、約束をという言葉が印象に残った。相手の権利を尊重し、共感しながら進めていくことがよい行動につながり、周りに流されずに自分で判断できる子供に育つと思った。普段からの声かけも気を付けていきたい。
- ◆DC教育を小学校から積み上げていくことは、ネット上の世界が公共の場であるという意識を高めていく上で重要だとわかりました。現在起きているSNSに関わる生徒指導問題も、こういった意識が高まることで起きにくくなると思います。まずは今回実践事例として紹介していただいた内容を本校でも実践したいです。

「心の体力」を温めよう！ ちょんせいこ先生を迎えて（ファシリテーション研修）

先行き不透明な「予測困難な時代」と言われている現在、教師の役割も大きく変わろうとしています。松本市でもこの状況を受け、「子どもが主人公」とした授業づくり・学校づくりを目指しています。その実現のためには、子どもの主体的な学びを支援する「学びの伴走者」としての役割が教師に期待されています。その一つ方策となるのが、ファシリテーションのマインドセットとスキルではないでしょうか。

10月16日（月）、日本のファシリテーションの第一人者で「ホワイトボード・ミーティング」の開発者としての有名なちょんせいこ先生（株式会社ひとまち代表）を迎え、「ファシリテーションの研修会」を開催しました。



研修の前半部分では、ちょん先生から出された質問（「好きな食べ物は何か、ストレス発散法を書いてください」等）に対してホワイトボードに回答を書きました。ちょん先生は、参加者一人一人のボードに書かれた回答を読み上げた後、「手を挙げたときに先生から指名されないと『無視をされた感じになる』と言ったお子さんがいました。こうやって回答を一つずつ読み挙げると、承認をしてもらったように感じら

れる子が多いようです」などと、ホワイトボードに書くよさを語られました。

その後、「ホワイトボード・ミーティング」の基本的な考え方をお聴きしました。

◆私たちの体には体力があるように、心にも「体力のようなもの」があります ◆「心の体力」が温かいと私たちは自分の力を発揮して生きやすくなります ◆「心の体力」はいろんなもので温まったり、冷めたりしますが、一番、大きな影響力をもつのは日常のコミュニケーションです ◆ホワイトボード・ミーティングは相手の意見を書くことで承認します

次に、「ホワイトボード・ミーティング」の「9つのオープン・クエスチョン（「～という？」「どんな感じ？」など）」と「8つのあいづち（「うんうん」「なるほど、なるほど」など）」を実際に使い、参加者同士がペアになり、「ホワイトボード・ミーティング」を体験しました。実際に自分の意見を相手にまとめてもらったホワイトボードを見ながら「しゃべっていることをこうやってまとめてもらおうと嬉しくなる。子どもたちもこうやってお互いの考えを書いてもらおうと嬉しくなるだろうなあ」と満面の笑みを浮かべながら語る参加者もありました。ホワイトボードに書くのは初めてという方ばかりでしたが、参加者同士が和気あいあいとした雰囲気になり、あっという間の120分でした。



【参加者の感想から】

- ・ホワイトボードを活用する事で、クラスの皆の意見をひろう事ができ、子どもたちの承認を感じさせる事ができることを実践から学ばせていただきました。授業の中で活用することで、一日に何度もクラス全員の子どもたちとつながることができるという点が大変驚きました。早速実践できたらと思います。
- ・今日の講座で、聞く立場は疲れるということが分かりました。自分の話したいことを我慢して、教師の話を静かに聞くことは、さらに、生徒の心の体力も奪っているに違いないと思われます。教師の立場として、絶対的なリーダーとなり、生徒を受け身にさせてきた根本的な原因が実は自分にあったことに気づかされました。「一生懸命にまじめにやれるけど、いろいろなことに受け身である」という生徒の実態は、自分の学校で前々から教師たちが感じていた課題でした。地域性でも家庭のせいでもなく、自分たちの接し方や学びのスタイルがファシリテーターとして機能していない表れでもあったことが分かりました。…「認める」ことは、「褒める」ではなく「承認する」ことで、ちょっとした質問の技を使って聞いていくことで、きちんと一人ひとりが自分の考えを認めてもらったと実感できることが驚きでした。
- ・コミュニケーション力を高めるために「心の体力」を温めていくことというお話が印象に残りました。日頃から子どもたちのコミュニケーションを大切にしていくことや、子ども同士が共有できる問いを教師は考えていくことの大切さを学びました。ファシリテーション研修はとても楽しく学ぶことができたので、来年度もぜひ希望したいです。
- ・子どもたちにとって体験的な学びを通して、いろんな人とコミュニケーションをしながら関わり合うことが大切であることを学びました。発言力が乏しい児童はたくさんいますが、その子たちも立派な意見をきちんと持っているため、ホワイトボード等を使って誰でも意見を共有できる機会を設けることで、みんなが関わり合いながらさらに深い学びを実現できるということを学びました。